

伊藤武夫先生のご退職にあたって

國廣 敏文*

伊藤先生のご退職・最終記念講義にあたり、学部を代表して先生のご経歴をご紹介させていただきます。私が立命館大学に公募しました時、伊藤先生から面接を受けました。その先生が今年、無事に定年を迎えられ、学部長として先生のご紹介をさせていただくということで、一面では寂しくもあり、感慨深いものがございます。

先生は1963年に岐阜大学学芸学部史学科をご卒業後、立命館大学大学院経済学研究科で「日本における独占資本主義確立過程の構造分析」をテーマに研究されてきました。大学院修了と同時に、1972年から新潟大学専任講師に就任され、同大学の助教授を経て、1982年に立命館大学産業社会学部教員となられ、本学部では「産業史」、「現代史」を主な担当科目とされ、以後、現在に至るまで24年間の長きにわたって教育・研究に従事されてきました。

先生がこれまで歩んでこられた20世紀は、経済や科学技術の面から見ますと、エネルギー革命や情報革命という言葉に表されるような“科学技術革命の時代”であり、人類は大きな発展と進歩を遂げてきたわけです。その一方で、地球的規模での貧富の差、情報格差の拡大、環境問題の深刻化、テロや紛争、民族問題などの深刻な問題も出てきています。世紀末に急速に進んできた経済のグローバル化、それに伴う労働環境や雇用構造の変化、我々を取り巻く生活環境の急速な変化は、我々の未来を不透明なものにしています。その意味で、これらの諸問題の解明と解決が、今や人類にとって避けて通ることができない重要な課題となってきています。

伊藤先生の専門とする方法と領域は、もともとは経済学をベースとした産業史（自治体史、企業史もされていますが）から出発されたと理解しています。今日の日本社会の経済的特質を理解する視点として、先生は「工業化と社会変動」や「メディアと社会」、「市民社会とグローバル化」という問題に関心をさらに広げられてきています。先生の研究領域の広がりや深化の中に、グローバルな諸課題を解明・解決するには、歴史的視点および社会構造をベースをなす経済学的視点をしっかりと持ちながら、諸問題を総合的にとらえることが大切なんだということを先生はおっしゃっているように思います。

伊藤先生は大学内の行政や教学の点でも大いに活躍してこられました。1984年度に学部調査委員長（現在の企画委員長）、85年度には学部主事（現在の副学部長）を務められ、5年近くわたって学

* 立命館大学産業社会学部長

校法人立命館の評議員，94年度には大学の教学の最高決定機関である大学協議会の委員を務められ，さらに95年から2年間は産業社会学部長，社会学研究科長，学校法人立命館理事を務められるなど，立命館大学ならびに立命館学園の発展，教育・研究の推進のため大きく貢献してこられました。教職員組合の委員長を務められたこともあります。重要役職を長きにわたって果たしてこれらことは，先生の責任感の強さ，真面目な方であることが，大学の構成員から認められ信頼されてきたからだと思います。

このように伊藤先生は，教育・研究・校務それぞれの面で大いに活躍されてきました。今回，定年を迎えられますので，「長い間，先生お疲れさまでした。これからゆっくりなさってください」と申し上げたいところですが，まだまだお元気で若々しい気持ちと活力を持っておられます。4月から立命館大学名誉教授の肩書を付与されます。立命館との関係は「永遠のもの」になっていくわけです。今後は，我々の“先輩”として，学部の教学に大所高所から忌憚のないご意見，ご批判，お力添えをいただきたいと思います。私たちといたしましては，先生がこれまで取り組んでこられた諸課題や問題意識を，それぞれの立場で受け止めながら，今後の研究の推進と学部・大学院教育に邁進しなければならないと決意を新たにしています。

最後になりましたが，これまでの先生のご業績とご活躍に敬意を表しますとともに，本学部ならびに大学へのご貢献に感謝いたします。先生，これまで24年間の長きにわたって，ご尽力いただき本当にありがとうございました。これからもお元気でご活躍ください。以上をもって，学部を代表いたしまして，先生のご経歴のご紹介と先生への謝辞といたしたいと思います。どうもありがとうございました。